

校長だより

ある研修会で聞いた話ですが、ある日本の学校に、アジアの国から、若手の先生二人が研修で来られたそうです。ある朝、その二人の先生が校門で朝の挨拶をして子どもたちを迎えていたそうです。ニコニコした笑顔で朝の挨拶をしていたお二人の先生方が、ある児童の顔を見た途端、お互いに顔を見合わせて突然泣き始めたそうです。「どうしたのか？」と尋ねると、「今通った日本人の子どもの顔や様子が自分の国のある子どもとそっくりだったからです。」と答えたそうです。その子は「学校が大好き」で、休みの日でも月曜日の朝が来るのを楽しみにしているような子どもだったようで、学校に来ると門で挨拶をしている先生の所に必ず近寄って来て楽しくお話していくのが日課だったようです。その子の夢は学校の先生になることで、勉強や運動も頑張っていたそうです。ところが、ある朝、いつもの時間が来ても姿を見せないことに先生たちが心配して様子を見に行くと、がやがや人だかりがします。どうしたのか見に行くと、子どもが事故にあったというのです。事故と言っても、地雷による爆発事故でした。その事故の犠牲で、その子が亡くなったそうです。先生たちは、日本に来てあまりにその子とよく似た日本人の子どもを見て、驚くとともに悲しみがこみ上げて来たそうです。その国には、長い間の戦争の過去があり、国のあちらこちらにはいまだに地雷がたくさんあるそうです。そのため、人々は常に前方の足元を見ながら歩く習慣がついているそうです。

もう一つ、これはある日本の学校に国際理解の授業で外国人の先生が来られた時のお話です。質疑応答の時間に、ある生徒が「日本人は働きすぎだと思いますか？」という質問をしたそうです。すると、その外国人講師は、しばらく考えてから、「私は私の考える〈働く〉ということと、日本人の考える〈働く〉という

ことには、違いがあるように思う。」とおっしゃいました。その方は自分の国の中では自分は比較的裕福な方で、子どもころに、毎日スクールバスで学校に通っていたそうです。ところがスクールバスでの道中、同じ年ぐらいの子どもたちが路上でモノを売って働いている様子をよく見かけたそうです。その子たちは、当然学校に行くことも出来ず、一日中働いているそうです。その国の人にとっては、働かないということは、食べていけないことを意味し、つまり生きていけないことを意味するということです。日本のように社会保障の制度がしっかりしていて、国自体が経済的に豊かでサポートしてくれる国と違い、その方の国では、生きていくためには働かないわけにはいかないといった状況があるというのです。日本人は、働きすぎとよく言われているが、その方からすると、生きるために絶対働かないといけない働き方は、もっと厳しいものがあるとおっしゃっていたそうです。

この二つの話に共通するのは、日本のように、豊かで平和で安全な国は、世界の中では珍しいということです。戦争のない日々が当たり前、毎日の食事を食べられるのが当たり前、病気になれば治療してもらえるのが当たり前、学校に行けるのが当たり前という具合に、我々からしたら、当たり前のことのありがたみを忘れてしまいがちなのかもしれません。当然、そこから生まれてくる価値観と、他の国の人々の価値観とは、大きな違いが生じてきます。

日々の暮らしに感謝しながら、精一杯生きていくことを考えていかないといけないことを感じました。